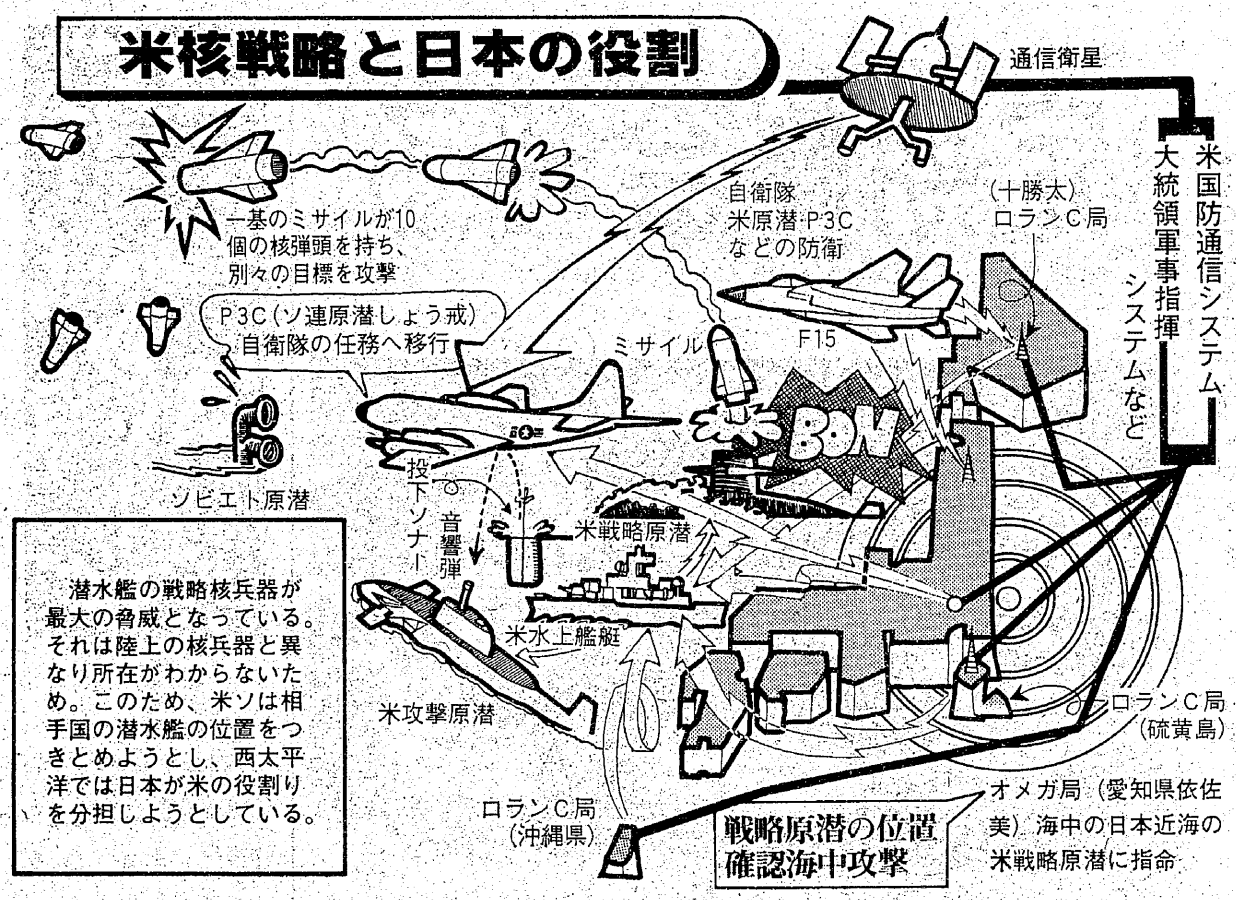
米核戦略と日本の役割



潜水艦の戦略核兵器が最大の脅威となっている。それは陸上の核兵器と異なり所在がわからないため。このため、米ソは相手国の潜水艦の位置をつきとめようとし、西太平洋では日本が米の役割りを分担しようとしている。

広がる核への恐怖

米の対ソ戦略基地日本

▼…核兵器（原水爆ほか）に対する国じゅうの恐怖が高まっている。わが国の軍事機構が、余りにも向う見ずなレーガン・米大統領の、まったくの手先にされてしまっていることから、恐怖は当然である。

核戦争抑止力のために、かえって核開発競争をあおり、今では敵側の報復能力をも破壊して、自分だけ生き残る先制攻撃を可能にしてしまった。日本は沈没しても、アメリカは存在し続けることができる。そのほかイラク、パキスタン、ブラジル、アルゼンチン、リビア、エジプト、台湾、韓国が注目されている。

▼…今世界中で稼動している原発は二十二カ国で二百四十七基。毎日、二十発分の原爆製造可能のプルトニウムがつくり出されている。

すでにインドが核爆発を行ない、イスラエルと南アフリカも核をもっていると見られている。

▼…こんな状況のなかで、アメリカの対ソ戦略のための基地にされてしまったわが国は、平和のためにこそ被爆国の義務として努力すべきを、反対に軍備強化に狂奔している。事態はまことに恐ろしい段階だ。

この歩み何を求める？

原水爆にさらされる人類

人類に対する最初の原子爆弾投下は昭和二十年八月六日広島に。

次はその三日後の九日長崎で。広島の場合がウラニューム爆弾で、TNT火薬十三キロトンの威力だった。上空五百八十メートルで爆発、その瞬間爆心地の温度は三～四千度に達し、人間は蒸発した。死者二十万人。

長崎の場合は、プルトニューム爆弾だった。TNT火薬二十二キロトン分で、死者約十三万人。両方合せて、今も苦しむ被爆者なんと三十八万人。

人間の被爆は続く。昭和二十四年三月一日、わが国の漁船〝第五福竜丸〟がビキニ海域で、こんどは水素爆弾に。そのため乗組員の一人――久保山愛吉さんが死の灰を浴びて死んでいった（その年の九月二十三日）。

世界中に、原水爆禁止の声湧きあがり、たまりかねたようにして英国のラッセル卿、アメリカの世界的物理学者、アインシュタイン博士らが連帯して「宣言」。各国の政府首脳に、核戦争の危険について警告。わが国では昭和三十年に、第一回原水禁大会が広島で開催された。世界人類が原水爆にさらされているとき、原水禁運動は一日も早く統一の歩みをつくり出さなければならぬ。

全員、申請を却下

宮浦鉱長室事件に判決　組合、控訴を決意

かねて三池労組は、会社が行なった不当解雇に反対し、あくまで組合員（山本行満さんら六人）の三池炭鉱における身分をつらぬくため、かねて福岡地方裁判所に地位保全仮処分を申請、法廷で闘ってきた。

昭和四十四年十一月十八日の提訴後、重ねた公判三十八回。すでに五十四年に結審となっていた。

その後二年余り放置されたままだったのが、ようやく七月二十一日にいたって判決となったもの（月）にまでさかのぼる。

の、かんじんの判決は全員の訴えを却下し、会社が行なった解雇は正当、としたのである。

三池労組は、あくまで解雇が不当なものであることを主張し、なお判決が結審後二年余りも放置されたことへの怒りもこめ、ただちに第二審に控訴して争うことをきめ、近くその手続きをとる。

ことは、三池労組の、宮浦鉱坑口閉鎖を骨子とする第四次合理化攻撃反対闘争（昭和四十三年七月）にまでさかのぼる。

たまたま宮浦鉱の鉱長室に座り込んでいた組合員に、介入してきた警察機動隊が弾圧を加え、二十一人の組合員を逮捕した。

これに前後して、会社は不当解雇を中心にあらゆる処分を加えてきた。以上の、解雇されたなかの六人が、「会社の処分は不当」（事実また会社が指摘するような行動はしていない）として、この法廷闘争に立ち上がったもので、六人とは次の人びとである。

山本行満さん　宮浦元機械工
小山一弘さん　〃　元仕繰工
山田邦泰さん　〃　元払採炭工
田中　賢さん　〃　元機械工
藤沢孝雄さん　〃　元組合役員
中島良祐さん　〃　元仕繰工

ひき続いて、全組合員の支援をお願いする。

今後も三本線の団結を

命ある限り協力惜しまず

定期総会で、退職仲間が謝辞

三池労組の定期総会の席で、六十五人の定年退職者が槙枝総評議長、野呂炭労委員長、それに沖三池労組組合長の連署による光栄の表彰を受けた（定期総会は、別項記事参照のこと）。

退職者はみんなの前に元気な顔で立ち、なかの一人――柳田秀吉さんが代表して謝辞を述べたが、言葉は感激でとぎれ勝ちだった。

次は、その謝礼の言葉である。

謝礼のことば

本日ここに、栄えある三池労組の定期総会の席上において、私たち定年退職者に対する表彰の栄に浴しましたことは、一生忘れることのできない感激でございます。

三池闘争をともに闘い、ありとあらゆる差別の苦しみのなかで労働者の権利と自由を守り、組合の基本である団結・抵抗・統一の三本線のもとに今日まで歩いてまいりました。

労働運動史上、最も多難なこの時機に組織を離れることは残念でありますが、定年という規約がある以上やむを得ないことです。

ふり返って見ますと、闘いのなかにも笑いあり、悲しみありで、喜怒哀楽の連続でございました。そのなかの悲しみの一つに三池大災害裁判がありますが、私ども一同はたとえ組織を離れて一市民となり、地域社会にあっても、三池労組ある限り、生命ある限り側面から協力を惜しみません。

組合員・主婦会員皆様、健康と職場保安に留意されまして、いつまでも三池労組の旗のもとに闘い続けて下さい。

受彰の人びと

受彰の仲間たちは次の通り。

×

上田徳助、福田秀吉、江崎藤太、福田喜代治、古川　実、原田文吉、山口　務、中内政治、坂崎直、福島富雄（**以上四山関係**）、平　君子、坂上国光、田中カツエ、岡本清助、山口静男、蓮尾信治郎、柳田秀吉、親泊重光、嶋　一男、中川勇喜、合志幸男、松本重則、金栗健司、古賀徳継、猿渡国雄、嶋村豊彦、蓮尾利徳、吉田大智加、池松時治、古川正則、渡辺二人、中川巳義、板倉晴光、江川正義、佐藤忠美、中村政晴、滝沢八十八、黒田憲治、弓掛隆人、岡野　守、今村時光、原武徹男、石田末義、原　政義、三島　薫、切口勝光、八反虎男、堀川教雄、植田文幸、緒方昌司、酒井杉雄、有働良明、緒方八郎、伯川良一、田畑朝枝、荒木茂治、杉　久雪、小森隆一（**以上三川関係**）、森沢重男、山下　開、西村政之（**以上本所関係**）、松尾勝巳（**三作関係**）。

以上のほか、次の三人の仲間が死亡のため退職、表彰を受けた。中田勝（**四山**）、吉田哲郎（**三川**）、東　実義（**本所**）。

右三人の仲間には、改めて、心から哀悼の意を表明したい。なお、壮健で退職した仲間に対しては、今後ご自愛専一に、いっそうのご活躍をお祈りする。

×

以上、姓名については敬称を省略させていただきました。

なかま

職場二十五分会（本所）

原　美代子さん

▼…まじめで、熱心な活動家である原さんは、三十九年十二月の青年婦人部結成と同時に婦人部長に推挙され、二期も。「やがて定年になるから、ということで、昨年と本年と再び、婦人部長を二期やることになった」、とも話しておられます。

▼…職場新聞〝ほんしょ〟の編集委員をも、五十三年度から四期。女性らしい、ユニークなニュースを提供してもらっています。

十四年十月の入社まで、自宅で助産婦をしておられました。

山ノ上病院（その後廃院）に入社して間もなく、七夕診療所に転出。そこで閉鎖になるまで約十二年間働き、その後三池労組員の看護婦さんの例にもれず、各分院・診療所を転々させられ、現在は三井大領病院の呼吸器科で働いておられます。

▼…趣味は？「趣味ですかあ。無趣味というのが趣味かなあ。看護婦の仕事。組合活動。家庭。家事。さらに畠が三～四畝。趣味を楽しむ時間はなかった。でも、一年余りで定年ですから、今からさがしてでも、趣味を楽しまなくちゃ―」、とのことでした。

▼…家族は、すでに定年退職されているご主人と、東京に就職されている息子さんとの三人です。

（この項西山正勝・記）

原さんは、勤続32年という看護婦さん。大牟田市大字歴木1091番地の自宅に、ご主人と二人住まい。